



評者は大学時代、近世・近代を中心に歴史学を学んでいたが、大学を出て泉佐野市の市史編纂事業に携わるようになると、民俗編の担当者となった。そのため民俗調査にも参加させていただき、市民の方々から多くのお話を聞かせていただいた。そのなかには泉佐野市の歴史に関わる伝承も多くあったが、それらが文献史学の立場から注目されることはほとんどなかった。評者はこの点に違和感を覚え、何とか民俗調査で収集された口頭伝承を、文献史学でも利用できないかと考えていた。そこで評者に『新修泉佐野市史』の執筆が依頼あった際、なんとか口頭伝承を利用したいと考え、「土丸移転伝承」を取り上げ執筆した。それについては『新修泉佐野市史』第2巻（清文堂出版、2009年）に掲載されてい

るが、そこで評者がなしえたことは、泉佐野市土丸に伝わる集落の移転伝承が、文献上からも事実として考えられることを指摘しただけにとどまる。ようするに口頭伝承が歴史的事実とできる可能性を有することを、文献を用いて証明しただけであり、評者の違和感が消えるわけではなかった。

そこに本書の紹介・書評の依頼をいただいた。本書を目にしていなかった評者は、返事を保留し、とりあえず図書館で本書の「はじめに」だけに目を通した。そこで受けたインパクトは、評者に本書を一気に読ませるには十分なものであった。評者が本書を評するうえで適任か否かは、評者も考えるところではあったが、評者が抱いていた違和感を解消してくれるのではないかと期待があり、紹介・書評をお引き受けすることにした。

ここで、少し煩雑になるが、目次を掲げて全体の構成を確認しておこう。

はじめに — 生活の中の文字 — (笹原亮二)

第一章 「口頭伝承と文字文化」の位相

- ・〈声〉からみた文字 — 日本列島における歴史と民俗の領域から — (小池淳一)
- ・民俗学と資料 (笹原亮二)

第二章 メディア

- ・疫神と呪符 (大島建彦)
- ・狐狸の書・神々の帳面 — 書記行為の民俗をめぐって — (小池淳一)
- ・奥会津の番匠巻物 — 系譜・由来・呪い歌 — (宮内貴久)
- ・近世の易占書 — 土君子の易・市民の易と疫病・祟り・米相場 — (井上智勝)

第三章 地域社会

- ・近世後期村役人にみる文字文化と口頭伝承 — 甲斐国巨摩郡河原部村平賀秀長『拾集録』『後続日記』を素材に — (山本英二)
- ・巻物のある風景 — 三匹獅子舞の上演に用いられる文書類の諸相 — (笹原亮二)
- ・近世における地域の伝説と旅行者

—「西国順礼略打道中記」を中心に—
(青柳周一)

第四章 歴史

- ・「浮鯛抄」をめぐる文字と口頭の伝承
(川島秀一)
- ・「近世的」職人由緒書の形成と展開
— 髪結職由緒書を例として — (榎美香)
- ・楯無鎧をめぐる伝承の実体化
(西田かほる)
- ・書きとめられた伝説
— 地誌・郷土誌と伝説集 — (久野俊彦)

第五章 「口頭伝承と文字文化」の周辺

- ・『コーラン (ケルアーン)』と
イスラム共同体(ウンマ) — 儀礼的音声
言語の社会的機能に関する言語情報学的
考察 — (西尾哲夫)
- ・疫神詫び証文の伝播分布に関する情報学
的アプローチの試み — 計量文献学お
よびGISを用いて — (小田淳一)
- ・「日本語の乱れ?!考」 — 現代の「若者言
葉」の動態めぐって — (長崎伸仁)

あとがき

目次を一瞥してもわかるとおり、民俗学・歴史学を中心に多彩な内容となっている。

次に各章ごとの内容を概観しておく。

「はじめに」は本書の研究視点・方法論を提示する。笹原は口頭伝承だけでなく、文字や文字テキストの生活実践の現場におけるそのあり方も含めて分析することで、生活実践に即した新たな民俗文化理解が構築できると指摘する。そして、民俗学も「文字の民俗学」を方法論の一つとして明確にすることの必要性を説き、網野善彦の史料論などを参考に「文字の民俗学」と歴史学との親近性を認め、両者の協力が必要とする。「あとがき」によれば、本書は笹原が研究代表をつとめた国立民族学博物館の共同研究「口頭伝承と文字文化—日本の民俗社会における知識と情報の伝承—」の成果であり、笹原のこのような問題意識の一定の成果と考えられる。

第一章は「はじめに」とともに本書の方法

論や研究視点に関する内容となっており、本書の前提ともなる部分である。小池論文では、これまでの歴史学と民俗学の研究成果を概観するなかで、「〈声〉と文字をめぐる問題探求の可能性」(30頁)を指摘する。そしてその可能性として「文字に含意されるものの多様性」「コミュニケーション自体を多義的・多方向的にとらえ、時空を越え得るものとして考える」こと、「儀礼構成や社会的な結合・紐帯における文字の役割」(30頁)の三つを指摘する。

笹原論文は、柳田国男からの民俗学の流れを概観し、民俗学的な資料としての文書の価値認識の変遷を追う。そして、文書の内容を重視するのではなく、その機能・役割や保管状況など現地でのあり方において認識する「採集資料としての文書」という考え方を提示する。また、民俗学が文書を採集資料として捉える視点を有することに、歴史学と民俗学の共有・共用可能な資料空間の実現を目指す。

先述したように第一章は「はじめに」とともに本書の方法論・研究視点を示したものであり、本書の核となるものである。後述するが、文書館等の古文書担当者にとっても示唆に富む内容と思われるので、この部分だけでも一読の価値があるものと考えられる。

第二章から第四章までは、「はじめに」および第一章で示された方法論を具体的に実践した内容となっている。

第二章は知識や情報等を流通・伝承させるメディアとしての文字の機能に注目した論文が集められている。大島論文は疫病退散を祈願した呪符の受容形態を分析する。小池論文は動物が書記行為をおこなう伝承に注目し、庶民生活のなかにおける文字に対する意識や位置づけを探る。宮内論文は奥会津に伝わる番匠巻物を分析し、その内容が乖離し、呪物的存在として機能していること指摘する。井上論文は近世の易占書をとおして、「士君子の易」と「市民の易」に分化した近世の易が、融合していく過程を分析する。

第三章は地域社会に注目した論文が集められている。山本論文は名もなき市井の人々として平賀秀長を取り上げ、彼が書き上げた書物に注目し、口頭伝承が書物と相互補完するものであったことを指摘し、秀長が口頭伝承をどのように認識していたかを示す。笹原論文は三匹獅子舞の上演において文書がどのように用いられるかを分析し、文書の内容ではなく、文書が存在しているという共通認識の意義を指摘する。青柳論文は近世の宿泊業者・飲食業者・寺社などが中心となって出版された道中記を取り上げ、地域の伝説を語る意味には、誇りの表明や自己主張のほかに、経営戦略的な意味があったことを指摘する。

第四章は歴史に対する認識や意識をかたちづくってきた文字テキストや口頭伝承を取り上げた内容が収録されている。川島論文は家船漁師に伝わる「浮鯛抄」を素材に、「浮鯛」という漁と浮鯛祭り・文字テキストとしての「浮鯛抄」・「浮鯛抄」が生み出した口頭伝承、それらの複雑な関係をあきらかにする。榎論文は髪結職由緒書の成立過程を分析し、また明治期にそれがみせる新たな展開も指摘する。西田論文は楯無鎧に関わる伝承を取り上げ、江戸時代を通じて、楯無鎧をめぐる伝承と由緒が何度も再構成されていくことを指摘する。久野論文は明治期以降の口碑・伝説を分析し、昭和期には口碑・伝説が「歴史」と「伝説」に分化していく過程を示し、文字化されたものと口頭伝承という伝説の二面性を指摘する。

第五章は口頭伝承と文字文化に関する議論を多方面に拡張・応用していく可能性を示す論文で構成されている。西尾論文はコラーン（クルアーン）を言語情報学的に分析したもので、他分野のみでなく他地域への広がりの可能性を示す。小田論文は疫病の詫び証文の計量文献学的分析とGISを用いた分析を試みる。第二章の大島論文ともリンクするところがあり、他分野への広がり可能性を具体的に示してくれる。長崎論文は言語学・日本語学的分析から、いわゆる「日本語の乱れ」に

ついて言及している。

極めて簡単ではあるが、各論文を概観してきた。民俗学・歴史学を中心に情報学・言語学など多様な論文が収められており、評者には十分に言及する力がないが、評者なりの感想とこの書の指摘する問題を文書館・全史料協などの立場から評者の思うところを述べてみたい。

本書を一読して思ったことは、民俗学からの文字テキスト・文書への積極的なアプローチである。とくに第二章の宮内論文や第三章の笹原論文は文書の内容ではなく、現地での機能に即して文書を民具としてみることで、文書のあらたな可能性を具体的にみせてくれている。それと比較すると歴史学からの論文は口頭伝承がどのように歴史を語る資料として使用されてきたかを分析したものが多く、方法論的に困難な点が多いのは理解できるが、現在に伝わる口頭伝承を歴史学の資料としてどのように利用できるのか、このような点に対する試論を提示してほしいという思いが残る。口頭伝承を歴史学の資料として利用するための前提作業として、口頭伝承が使用されてきた歴史的過程をあきらかにする作業は重要であるが、もう少し積極的な提案がほしいというのが本音であり、先述した評者の違和感も完全には解消されていない。まだまだ課題が多いことは評者も承知しているが、本書の成果を無駄にしないためにも、今後も歴史学の方からの口頭伝承に対する積極的なアプローチを期待したい。

最後に文書館・全史料協的な立場から筆者の思うところを述べてみたい。文書館をめぐる議論のなかで、「書籍は図書館へ、文書・記録は文書館へ、博物資料は博物館へ」などと言われていたことがあった。これは古い話で、現在ではあまり聞かれず、どのような有効性をもっているかはわからないが、根底にはこのような考え方が残っているのは事実であろう。古文書担当者の書籍や博物資料に無関心な態度は現在も見られるものと思われる。たとえば、笹原も期待している古文書調

査の「現状記録」という方法がある。古文書群の保存状況やそれを解体していく過程を記録するのが「現状記録」であるが、古文書だけを対象にするのであれば、笹原の期待にこたえることはできない。古文書群の周辺に何が保管されているかも記録し、それらも含めて古文書群を考えていくことが必要となろう。また、周辺に保管されていた民具等の資料と古文書群との関連が考えられれば、それらは一体として調査され、保管されるべきである。そうであるならば、「文書は文書館へ、民具等の博物資料は博物館へ」などと資料が分散されるような議論は有効性を持たないであろう。このように考えてくると、文書館における古文書担当の役割は再考をせまられていることは、明白であろう。現在の全史料協

の議論では、公文書を中心に文書館の議論がおこなわれているが、古文書に関する機能も有する文書館もあるのであれば、全史料協でも文書館における古文書の位置づけについて、新たな議論を展開する必要があるであろう。今後は本書で提示された民俗学からの文書へのアプローチも含みこんだうえで、古文書調査の方法論が議論されていくことを期待したい。

ここまで、本書を概観し、評者の思うところを述べてきたが、評者の力量不足もあり、誤読など各執筆者の意図を十分に読み取れなかった部分も多々あるであろう。各執筆者や読者にはご海容をお願いしたい。

〔歴史館いずみさの 宮田 克成〕